



新うす雷物後巻四

みやこ賢女鑑

やういの中あらうりみとうよりーさうされーも
くさあーはーれ七月ゆぐたぐいのあをーもど
うたさうーごーしーうとゆたさーい七月十八日
はぬれ三姉んとうむーひて
思ひとや三とせれ秋とさうさく又神ふあひん
うとあといは三姉んもたて人にもあはとほうとさ
あう入あれたとそれはいともいさうらとたて
あうんどありしゆへはあはつーいには引さうさ
くさつさうさあうさあうさあはさつさうさ
あうの今れわくあうさうさあういさうれ
あうれあうさうさあうさうさあうさうさ

これとて、^うみ^にてむとて、れ^は孫^はなり

花のつゝいふつゝのそと

正徳十一年
 春
 二月
 朔
 日
 壬
 子
 年
 二
 月
 朔
 日
 壬
 子
 年

びて下せりる麻風人よか何うもぬをそと
 新抄撰

新引成いふも金と云ふは力な所なりと人
を説く也

子類集

今うとてふいぞもどぬしけふとてふべ
うらんは 同

ひねう 破やぶの清きよ見みがせにわやうと改かへとたぬ見みをたに
詞花

ふぐれいそんをうぐりし書^きためてせまのぬゆかをもあたり
子藏

つるふゆさくらももつる

うらまけをうらまゆればうらまひはぐれ
しうらまひ今ゆくとあるといふ所ぞうらまひはぐれ

三 砂人としてしねるひしとるふれぬるに思ひ

うゝせのあろばにふさう続ゆりはぞく

つとにふとあつたし
あつたし今更のうら

そをこれかゝるにまうと爲しとれたるは

とうりーしーうゑーとーのそびのせりあー

うゝみとあるゆゑにあり母のふとくをせしめて

この夢へどいほくもべしぬがたうけそぬり

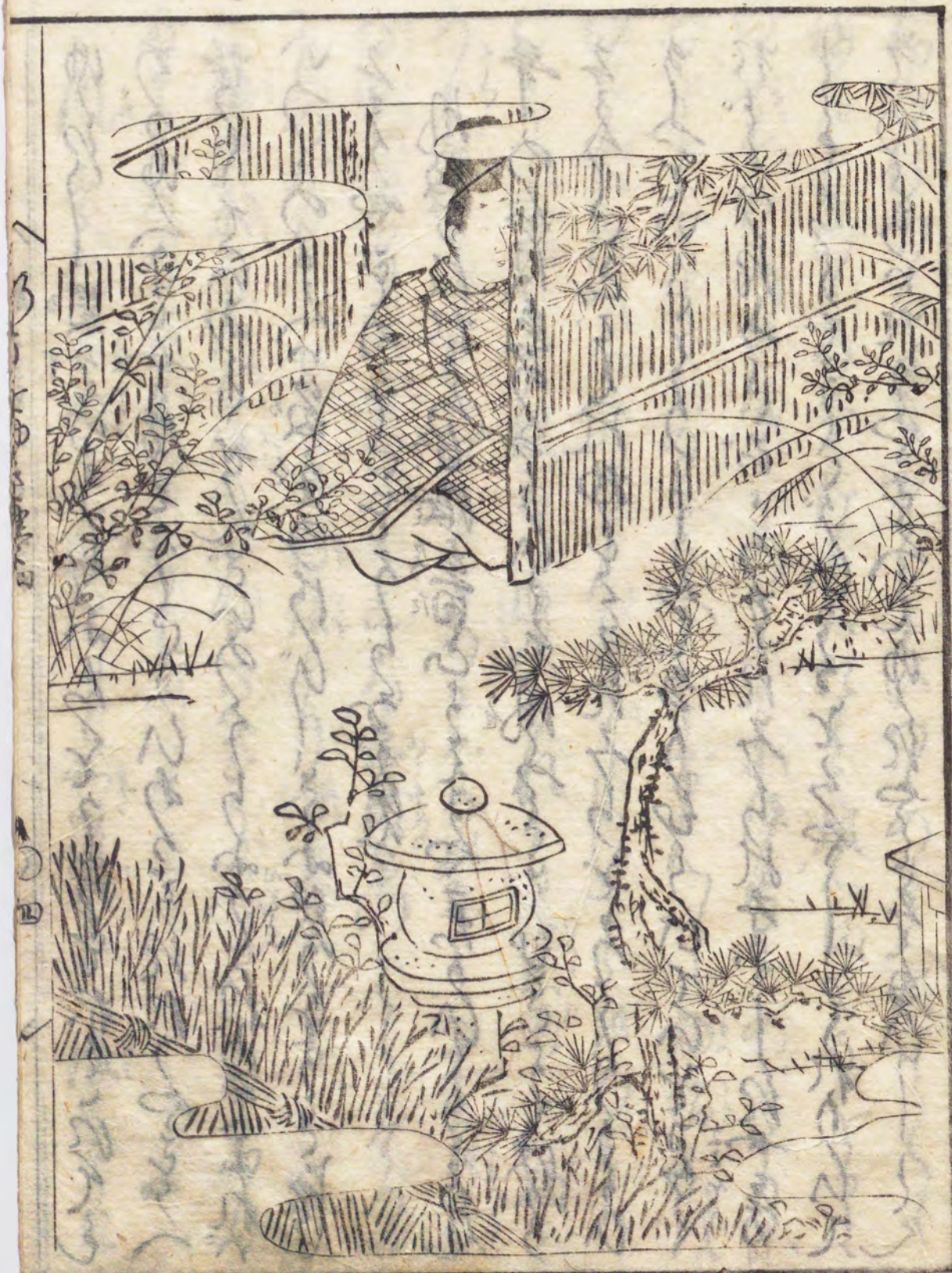
おとろふいそこの美よりあやめゆゑせての

不^レあ^レは^レい^レと^レい^レふ^レも^レあ^レら^レい^レ

人々をこのふくをばしにうねるのみくくく

すくひをふりてせらとゆたふのあつを

ちこそめうへうくちめいりく
 水鏡云々



ありては種とけきしをて作らふての云とせ
 いくつぬいふら祝者後とふくをそと百をんつ
 町たきうてかこそりかてそれゆいぐんを
 ぬいせう人の内とともやをえきうてとれり
 するとのをぬいゆえにうろひぬをてとれり
 そのなりをんうてはつりてり

ういふぬえんてんてんてん



雲の日はひかり

雲の
 雲の
 雲の

ありては種とけきしをて作らふての云とせ
 いくつぬいふら祝者後とふくをそと百をんつ
 町たきうてかこそりかてそれゆいぐんを
 ぬいせう人の内とともやをえきうてとれり
 するとのをぬいゆえにうろひぬをてとれり
 そのなりをんうてはつりてり
 ういふぬえんてんてんてん
 雲の日はひかり
 雲の
 雲の
 雲の

卷之六

拾遺

太極のこころを

ら
たま
玉の
と
珠も
とも
あざ
いり
あざ
くも
うな
したる

新舊

この夜で終りなりとていふとき今これよりとて
 神ふけうしなるとこの處ありあつたうしとて
 うらうしとのまゝにあらうしとていふはうし
 めいとうとはまゝにあらうしとていふはうし
 うれとあらうしとていふはうし
 われとあらうしとていふはうし
 おもひとあらうしとていふはうし

物類

子思子居

王侯よりぬきたりたぐふぬきたりたぐ

そのいやせぬに
あつちを
国

Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style, arranged in vertical columns. The text is written on aged, slightly stained paper. The characters are fluid and connected, typical of the cursive style. The columns are roughly aligned from right to left, with some characters extending across the page boundaries.

Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style, arranged in vertical columns. The text is written on aged, slightly stained paper. The characters are fluid and connected, typical of the cursive style. The columns are roughly aligned from right to left, with some characters extending across the page boundaries.

このゆへにさうさのゆへにねとひらきあへば
かみふさうりてふ

くれけはげとねばふかよなげはうゆれふふ
そのゆへにあへば目ふかりけしむ

我ふふさうりてふさうりてふさうりてふ
ゆふさうりてふさうりてふさうりてふ

うふさうりてふさうりてふさうりてふ
あふさうりてふさうりてふさうりてふ

あふさうりてふさうりてふさうりてふ
うふさうりてふさうりてふさうりてふ

うふさうりてふさうりてふさうりてふ
あふさうりてふさうりてふさうりてふ

あふさうりてふさうりてふさうりてふ
うふさうりてふさうりてふさうりてふ

うふさうりてふさうりてふさうりてふ
あふさうりてふさうりてふさうりてふ

あふさうりてふさうりてふさうりてふ
うふさうりてふさうりてふさうりてふ

うふさうりてふさうりてふさうりてふ
あふさうりてふさうりてふさうりてふ

あふさうりてふさうりてふさうりてふ
うふさうりてふさうりてふさうりてふ

うふさうりてふさうりてふさうりてふ
あふさうりてふさうりてふさうりてふ

あふさうりてふさうりてふさうりてふ
うふさうりてふさうりてふさうりてふ

わたりゆくて

新拾遺

けりしとてふたねふりぬり公のしるり
 ぬぐたとまらうまびてうてねくろと見えく

改らるる人々を以て
 約者ふとて之を以て今を以て
 よかりとて之を以て

新收錄

更ぬまにせりて我れをいふとあはれをわが
あつたきとていふてあはれをわが

修口齋

月と入るもあけぬまに
 ぬきあけぬまに

ふねふねとてつりか月さわぬ五時の元

よくてたきはいあくろ名月の歌まりじとゆぐに
このうしろけもいろうとゆたにうしろていゆえの

やうにふたつとゆふのうらめしきにはなほ

そしかりきくにあつとさうにゆき

つゝさくうさくさくさくさくさくさく
金糸

秋風ふぬきとされど金瓶のいふうらまじき人知とてなむ

ひろくろりてくろりてくろりて

つるしをばきしめぬまゝに
いかにふ物いかに

あそびにうみへいりて

こゝろをきこひふもてんわてゆり 来世に帰るゝこと

ふねをいそいでさめやゆいりて

恨と云ふは、
心の中に
あるもの
なり。其の
心を、
外にあらわ
すべし。

おとゐあんてきんぐにやほうれうをきめ

つりしる

ほろろとほろろとほろろとほろろと
うらうらとほろろとほろろとほろろと

うらうらとほろろと

うらうらとほろろとほろろとほろろと

うらうらとほろろとほろろとほろろと

うらうらとほろろとほろろとほろろと

うらうらとほろろとほろろとほろろと

うらうらとほろろとほろろとほろろと

うらうらとほろろとほろろとほろろと

うらうらとほろろと

うらうらとほろろとほろろとほろろと

桐花



うろのうろり 者ほほじてあつひけ
うろりあふ余あふちせうふけふひま
あふひふのふろりうろりあふひま
やうとねふひいばうかりあふひま
うちあふひまふひまうちあふひま
いふふあふひまふひまふひま
まげふあふひまふひまふひま
うろりあふひまふひまふひま

わうとあふひまふひま

